
IS ～運命を切り裂く剣～

ジョーカーアンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜運命を切り裂く剣〜

【Nコード】

N6220Z

【作者名】

ジョーカーアンデッド

【あらすじ】

ISを唯一使える男がいた。
運命を変えた一人の男がいた。
この二人が出会うとき、何かが起こる！
運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（前書き）

独自設定を、含んでおります。

まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

遠い昔、1万年に一度行われる『バトルファイト』と言われる自らの種族をかけた戦いが行われ、ヒューマンアンデッドが勝った。

その数百年後、再び、人々が彼らの封印を解き『バトルファイト』が行われた。

そして、怪人たちは戦いはじめ、人々をも巻き添えにしていた。それを食い止めるために開発された『ライダーシステム』と呼ばれる物を使って、人々を守るために『仮面ライダー』と呼ばれる4人が立ち向った。

恋人の仇を打ち、おのれの恐怖心をも打ち勝つために戦ったギャレン。

邪悪な心に立ち向かうために戦ったレンゲル。

怪人から人間になるために戦ったカリス。

そして、人類を救うために戦ったブレイド。

『バトルファイト』も残り二人になった。

ギラファクワガタの先祖…ギラファアンデッド。

すべてを破壊する存在…ジョーカーアンデッド、もとい、カリス。

ギャレンは、ジョーカーアンデッドが地球を滅ぼすわけがないと彼を信じ、ギラファアンデッドに単身で立ち向かった。

そして、一斉にダークローチが世界に出てきた。

レンゲルは、それをやめさせるためにジョーカーに立ち向かったが、本能にあらがえずにジョーカーアンドッドがレンゲルを倒してしまう。

そして、残ったのは、唯一アンドッドを封印できるブレイドとジョーカーアンドッド。

だが、ブレイドは自らがアンドッドになることで『バトルファイト』に終止符を打たせなかった。

時は流れ、約200年後。

篠ノ之束が作った『IS』は、世界に流通し始めたが、同時に戦争にも使われる可能性もあると疑い、『IS』の中心部であるコアを427個残し、行方をくらます。

ただ、『IS』は、女性にしか使えないということで女尊男卑になつてしまった。

だが、女性にしか使えない『IS』を唯一使えた男…織斑 一夏がいた。

そして、裏では『亡国機業』が、全世界を征服するための準備をしていた。

彼らは、見事、『亡国機業』の悪事をつぶせるのか！

運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（後書き）

コメント、お待ちしております。

プロローグ2（前書き）

グダグダになってしまった。

しかも、まだプロローグだあ！

束ちゃんのセリフもおかしくなった気がするう！

それでも、読みたい人はどうぞ！

ブローグ2

ここはとあるラボ。

ここでは、男女2人がひっそりと暮らしていた。

ガシャ、ーン……ウィー……ガガツ、ガガガ

そして、今、ここで作業をしている彼女…篠ノ之 束は、427
個あるコア以外のコアを使って無人機の『IS』を作っていた。

「束ちゃん！夕食できたよ！」

「はーい！いつま行つきまーす！」

そういつて、束は、彼女を呼んだ男…剣崎 一真に駆け寄っていた。

「今日は、ハンバーグだ。」

「やったー！やったー！」

と、いい、彼に抱き着いた。

「わかった、わかった。」

そして、頭を撫でながら食卓へと向かった。

一真は、食卓でテレビを見てた。

「へえ、男子が『IS』を使える…か。」

「あつ、ソースとつて…！」

「ああ、わかった。それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。」

男が『IS』を使えることってあるの？」

「ないない！あつたら男装した人か、特殊な人間だね。」

あつ！そうそう、そのことでさ、お願いがあるんだけどさ。」

「えっ？なに。」

久しぶりの、お願いだなあ。と、思い、そのお願いを聞き入れることにした。

あまり、束からお願いされたことがなかったからだ。

「あのさあ、いつくんの通ってる『IS学園』を守ってほしいんだけどいいかなあ？」

「いつくんって、織斑 一夏のこと？」

「うん！そうだけど〜！」

えっ、いつくんって一夏のことなんだ〜。「あれっ、でもなんでいつくんなんて言ってるの？」なんて言ってみたら、「いつくんと友達なんだよ〜。」と、言われ、大変なんだろうなあ〜と思った。

「で、なんで？また興味がわいたの？」

そう、篠ノ之 東は、興味がわいた人にしか話をしたことがほとんどない。

剣崎 一真も彼女にあることで気に入られ、彼女のラボに（強制的に）住むことになった。

「違う違う。まあ、それも少しは理由に入るんだけど。で、いつくんが狙われてるんだよ。亡国機業に。」

「亡国機業に。」と、言われたときに一真もタダ事ではないと思いき真剣に聞くことにした。

「でも、何故、彼が亡国機業に狙われているんだ？」

そうだ。彼が狙われる理由がない。

なら、何故？

「たぶん、彼にもうすぐ贈られる『白式』が狙われてるんだと思うんだけど、『白式』は、戦闘能力は十分すぎるんだけど、テスト操縦者が乗った時は、IS適正が全員Cだったんだあ。」

「で、その『白式』が、今度、『IS学園』に置かれることになったからってわけなんだあ。」

「それで、その『白式』とその操縦者の織斑　一夏といっしょに守ってくれと。」

「そうなんだけどいいかなあ？」

と、上目遣い＋涙目で言われた。

もともと、断るつもりはなかったため、無駄なんだが。

「行くから、元に戻っていいよ。」

「そうだと思ったんだよお！」

そついい、後ろからだしたのは、偽造した教員免許と札束を手渡した。

「なにこれは？特にこの免許なんだけど。」

「これは、偽造した『IS学園』の教員免許、これで怪しまれずに学校に教師として行けるね。」

（偽造した時点ですでに怪しまれると思うんだが…。）

「あと、このお金は旅行代ね。守るのは良いけど、少しは、ゆっくりしてね。」

「えっ！あつ、ありがとう！」

「じゃあ、今日は寝ようか。」

と、言い食べ終わった皿を台所に置く。

「わかった。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい！」

そして、夜は更けていった。

次の日、一真は自分のバイク、『ブルースペイダー』に乗り、
『IS学園』に向かった。

プロローグ2（後書き）

コメントお待ちしております。

女性の中に一人だけ男！？/新しい教育実習生登場！？（前書き）

あぶねえ！

ギリギリのところで剣崎出せた！

それでは、どうぞ！

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？

ここは、『IS学園』。

ここでは、IS操縦者を育成する場所である。

教師や例外を除いて、全員女子である。

そう、例外を除いて…。

（はあ、なんでこうなったんだろう…。）

その例外の人物…織斑 一夏は非常に困っていた。

なぜなら、彼の周りは今は女子だけ。

これなら、反応に困るのも窺える。

では、何故、彼がIS学園に行くことになったのか。

それは、彼の勘違いにある。

彼は、本来ならば私立藍越学園に行くはずだったんだが、試験会場を間違え、IS学園の試験機を動かしてしまったからである。

まったくもって、勘違い男である。

「では、自己紹介をお願いします。」

（どうしよう、気まずい空気だ。

この状況を打開しなきゃって思うけど、箒は助けてくれないし。

）

「…り…め君、織斑君。」

彼が、思考回路を巡ってる間に彼の順番が来たみたいだ。

「あのー、大声出しちゃってごめんね。

でも、“あ”から始まって、いま“お”なんだよね。」

「だから、自己紹介してくれるかな。」

「駄目かなあ？」

そういつて、お願いしてきたのは、山田 真耶先生だ。

「いやあ、そんなに謝らなくても…。」

（チャンスだ！

自己紹介なら、この気まずい空気を変えられる。）

と、思ったのかいきなり立ち上がった。

「あつ、えつと、織斑 一夏です。

宜しく願います。」

と、言ったとたん、後ろ、キラーン と言う感じの視線を感じた。

（なんか、悪いこと言っちゃったかな。

だが、ここで黙ってるって悪いイメージというレッテルが張られてしまう！）

そう思い、強く息を吸い込む。

ほかのみんなが、見守る。

「以上です！……！」

言った瞬間、他の生徒は、ガクツと倒れた。

「え、あれ、だめでしょ「ゴンツ！」ズゴック！」

理解できてないのか、説明しようとしたら頭上から拳骨がふつてきた。

「ううっ！ いったあ！ つて、千冬ねえ」バゴン！

本日二回目である。

「学校では、織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。」

クラスへのあいさつを押し付けてすまなかったな。」

と、言って山田と交代したのは織斑 千冬だった。

（あれ？ なんで千冬ねえがここに？）

（職業不詳で、家にも数回しか帰ってこない俺の姉が……。）

そう思っていると千冬が自己紹介が始まった。

「私が、このクラスの担任の織斑 千冬だ。」

「君たち新人を1年で使い物にするのが私の仕事だ。」

自己紹介が終わった瞬間、教室が一斉に騒ぎ始めた。

「きゃー！わたし、織斑先生が目標できたんです。」

「あえて光荣ですー！ー！ー！」

「嫌いじゃないわー！ー！ー！ー！ー！」

「ったく。よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。
私のクラスだけに集中させているのか？」
と、言い千冬は、頭を抱え始めた。

（千冬ねえが俺の担任？）

「で、お前はあいさつも満足にできんのか？」

「千冬ねえ、これはその…。」

「織斑先生と呼べ。」

「はい。織斑先生。」

再び教室がざわめき始めたので、「静かに！」と、一喝した。

「諸君らには、ISの基礎知識を半年で覚えてもらおう。
その後、自習だが、基本動作は半月で体にしみこませろ。
わかってても、わからなくても返事をしろ。」

ハイ！

「では、教育実習生として、紹介しておく先生がいる、入れ。」

はい、と、言いドアを開けはいいてきたのは…。

「初めまして。剣崎 一真です。お世話になるかもしれませんが
宜しくお願いします。」

そついい、剣崎は頭を下げた。

ついに、唯一ISを動かせる男…織斑 一夏と
運命を変えた男…剣崎 一真が出会った。

さあ、物語の幕開けだ！

女性の中に一人だけ男！？/新しい教育実習生登場！？（後書き）

コメント、お願いします。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物（前書き）

はあ、またグタグタだ。

俺の体もボドボドだあ！

眠いが寒いから冬眠しそう。

冬眠ではなく永眠しそう。

だが、書く。

では、どうぞ。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物

時間をさかのぼり、2時間。

ブウ~~~~ン……キキーーー！

「ここがIS学園かあ。」
にしても大きいなあ。」

そういつて、バイクを止めたのは、剣崎 一真だ。

「どうやって入ればいいんだ。」

そういつて、ちょうど女性が門番のようにいたので聞いてみた。

「あのお、入らせてくれませんか？」

と、束からもらった偽造した教員免許を見せると、女性…織斑 千冬は驚いた素振りを見せると、「ついてこい。」と言い、IS学園の中に入っていたので、一真も入っていた。

「単刀直入に聞くが、お前の持っているその教員免許、偽造した物だな。」

とある一室に入らされた後、そういわれた。

「ギクウ！」

（もうばれちゃったよ、どうしよう…。）
と、思った一真は、必死に逮捕されないように抵抗した。

「違うんです！これは、そのう…。

そう！これはその手違いでして、

間違えてっというか「もういい！通報はしない！」へ？」

なぜ？と思った一真だったが、次のことを聞いてしっくりきた。

「お前のことは束から聞いている。

近々、偽造された教員免許を持つてくる男がいるから、
保護してくれとな。

で、なにが起きたんだ。」

そういわれ、一真はこの前束に言われたことを話した。

「そうか、私の弟が狙われていると。」

「私の弟？それってどういう…？」

「おお、まだ言ってなかったな。

私の名前は織斑 千冬。

織斑 一夏の実の姉だ。」

（ええーと、なんか見たことあるなあ。）

「あつ！思い出した！そういえばテレビで見たことがある！
確か、『モンドグロツソ』で優勝して『うるさい！』『すみませんでした。』」

「で、なんで束はこんなはしゃぐ男を送り込んできたのか分からん。」「ハア」

「まあ良い。あいつが選んだんだ。少しは手ごたえがあるか。」

（すごい言いぐさ。。。）

「ところで、次からその偽装した教員免許を持つてくるのもいろいろと面倒だからな。」

「この教員免許を使え。」

と、言つて出したのは『ちゃんとした』教員免許だった。

「これは？」

「次からはこれで、学園内に入れ。」

一生他の教師にばれないという保障はないからな。

これなら、半永久的に教育実習生としてここに来れる。」

（前言撤回！やさしい人だった！）

と、心の中で涙ぐんでいた一真だった。

「では、今日から教育実習生として来てもらつて。」

「わかりました！って今日から！？」

「黙って来い！」

本日二度目だ。

「すいませんでした。」

「こうして、彼の教員実習生生活が始まった。」

2 時間前の助っ人／優勝者と怪物（後書き）

今度は、『仮面ライダー 龍騎』と『とある科学の超電磁砲』をクロスしよう。

コメント、宜しくお願いします。

金髪女王／怒鳴った怪物（前書き）

金髪、登場します。

剣崎、怒鳴ります。

作者、永眠しそう。

だが、執筆します。

金髪女王／怒鳴った怪物

休み時間。

教室では一真と一夏が話していた。

「勉強ついていけてる？」

「いやあ、難しすぎて、全然わかりませんよ。」

「だよなあ。最初は難しいもんなあ。」

「でも、頑張りますよ。」

「意気込みは、完璧だね」「ちょっと、よろしくて？」……え？。」

と、いった、たわいのない話をしていると2人の後ろから髪は金色でロールがかかっている少女が現れた。

見た目的には、白○ルナと似てるといったら似てるのかもしいない。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでから、

それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「「誰（^{ですか}）です（？）」「」

「はい〜〜〜!？」

私を知らないと？

あなたは、良いとして、教育実習生である剣崎先生まで。
いいですか！私の名前はセシリア・オルコットですわよ!」

「ふ〜〜ん。」

「絶対バカにしてるでしょ!

覚悟しなs「キーンコーンカーン!」この恨み、あとで
きっちりつけますわよ!

あとで覚悟しなさい!」

そうして、彼女は去って行った。

「では、ただいまの時間をクラス対抗戦にでるクラス代表を決める
時間にします。」

と、山田が言った。

すると、即座に数人が手を挙げ、その全員が織斑君がいいと言っ
てきた。

そうしたら、セシリアがいきなり立って言った。

「待ってください!納得がいきませんわ!」

「何で、納得がいかないんだ。セシリア・オルコット。」

と、めんどくさそうに千冬が言ってみた。

「そのような選出は認められませんわ！」

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくしに、セシリア・オルコットにそのような侮辱を一年間
味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏が、立ち上がって反論しようとしたが、一真がそれを制した。

「そもそもですわん」「いい加減にしろ！」「：！」「」

いきなり怒鳴ったのは、一真だった。

「それ以上言ってみろ、オレハクサマラムツコロス！」

それに、ここは、いまお前のわがままを言う時間じゃない！

正々堂々と相手と戦ってから言え！」

どこぞのロリコンライダーの迷言を言いつつ、セシリアに怒鳴った。

その後ろでは、彼を見直したのか、なぜか誇らしい笑みを浮かべた千冬がいた。

そして、頭を冷やしたのかセシリアが言った。

「そうでしたわね。」

剣崎先生の言う通りですわ。

このセシリア・オルコット、一夏さんに正々堂々と決闘を申し上げますわ。」

「ああ、臨むところだ!」

こうして、剣崎の教育実習生活1日目が、終わった。

金髪女王／怒鳴った怪物（後書き）

コメント、お願いします。

決闘開始／決着と異形の怪人（前書き）

熱をひいてしまった。

とにかく、だるい。

剣崎が、ほとんど出ない。

だが、書く！

決闘開始／決着と異形の怪人

決闘当日。

一夏とセシリアが準備をしていた。

一真は、彼が守る対象でもある、『白式』が届いたということですぐさま、向かった。

「おい、剣崎。」

「なんでしょう、織斑先生。」

「あれが、お前が守る『白式』だろう。」

「そうです。」

でも、僕が守るのは一夏君や白式だけじゃありません。
この地球上のあらゆる人々を救いたいんです。
たとえ、この身に何が起ころうとも。」

「頼もしいな。」

だが、一人で抱え込もうとするな。」

「わかってるつもりです。」

「2人とも。」

一夏君がスタンバイ終わりましたよ。」

「わかった、山田君。」

行くぞ、剣崎。」

「ハイ。」

こうして、決闘が始まった。

「最初に言っておきますけれども、

正々堂々と戦わなければ、

私の小間使い。

いえ、奴隷にしますわよ。」

「上等だ！」

そう言い終わると、いきなりセシリアがビームライフル：スター
ライトmkⅡⅡⅡをぶっ放すと、白式に直撃し、何とか持ちこたえ
たが、立て続けに撃ってきた。

それからは、一夏の防戦一方だった。

「さあ、踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でるワ
ルツで！」

何とか、手で防御しているが、シールドエネルギーが徐々に少な

くなっていく。

「装備…装備…って、これだけかよ！

まあ、素手よりかはいいか！」

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型で挑もうなんて…正気ですの！？」

と、言いながら撃つが、一夏はコツをつかんできたのか難なく避ける。

「このブルー・ティアーズを前にして初見で、
こつも耐えたのは貴方が初めてですわね。
褒めて差し上げますわ。」

「そりゃどうも。」

「でも、そろそろフィナーレと参りましょう。」

すると、周りからも撃たれるようになり、よけきれなくなった。

「左足、頂きますわ！」

だが、よけられた。

「イチか、バチか！」

そついつと、銃弾をよけ、下から上に上昇した。

「うおおお！」

近づけたとき、剣を振りかざすが後ろに後退し、よけられる。

「むちゃくちゃしますわね！」

でも、無駄なあがきですわ！」

周りからも、セシリアの銃弾が撃たれるが、一夏はわかったように言った。

「わかったぜ。」

こいつらは、お前が命令しないと動かない。

しかも、そのたびに、お前はそれ以外の攻撃ができなくなる。」

「それは、意識を集中させてるからだ、そうだろ！」

「残り2機。」

あとちよつとだ！」

「わかりましたわ。」

4機だけではありませんのよ！」

「しまった！」

セシリアの放った、ミサイルが当たる。

「えっ！」

まさか、ファーストシフト！

あなた、今まで初期設定で戦っていたとでもいうのですか！？

「よくわからないが、これでやっと俺専用になったみたいだな。」

「ああ、もう面倒ですわ!」

「見える!」

その瞬間、周りの機体を破壊し、一気にセシリアの乗るブルー・ディアースに接近する。

「おりゃー!」

そして、自身の武器…雪片式型で斬ろうとするが、いきなり、シールドエネルギーが切れ試合終了のブザーが鳴り、「勝者、セシリア・オルコット。」とアナウンスが言う。

それもそのはず、雪片式型はシールドエネルギーを使い斬る刀だ。

そして、啞然とした顔でつたてている2人のところに、何かが落下してきた。

「危ない!」

そういい、自らも一緒にセシリアを押し、その場から逃げる。

「なんだ!？」

と、言い2人は落ちた場所を見る。

すると、そこには一体の異形の生物が立っていた。

決闘開始／決着と異形の怪人（後書き）

コメント、お待ちしております。

決着の少し前／ターンアップ！！！（前書き）

やっと、剣崎を変身させました。

少し、セシリアにフラグを立てました。

あまり、きれいにフラグを立てられませんでした。が。

次回は、セシリアとの共闘です。

決着の少し前／ターンアップ！！

決着がつく、少し前。

「テスト操縦士が動かしたとき、IS適性が全員Cだったのが嘘みたいな動きだな…。」

山田先生、一夏君のIS適性を見せてください。」

「はい、剣崎先生。

ええーと、彼のIS適性はBですね。」

「そうか、ありがとうございます山田先生。」

（だから、IS適性C以上の動きができるのか。

それに、白式も一夏君が初めてとは言えずすごい戦闘力。狙われるのもわかる気がするな。）

「あと、ちょっとで決着がつきますね！
織斑先生！」

「そうだな、山田君。

だが、あいつ、時々、手を開けたり握ったりしているだろう。そうしてときに限ってあいつは、失敗をするんだ。」

「よく知っていますね。

やっぱり、兄弟だからでしょうか。」

「ふん。」

ブー！ブー！勝者、セシリア・オルコット。

「ほらな。」

「そうですね、では、迎えに行つてk「ドカーーーン！」キャッ！」

爆音が鳴り響き、軽く地震が起きた時、真耶が倒れそうになったが、一真が受け止めた。

が、ちょうどお姫様抱つこのようになってしまった。

「大丈夫ですか！山田先生！」

「は、はい！ですが、少しこのたいせいは、ちょっと。。。／／／」

「す、すみません！」

「なに、のんきに漫才をしている！
今の状況を見る！」

「はっ！」

で、なにがあつたんですか？」

「何か、落ちてきたみたいだ。
フィールドの中央に人型の何かがある。
拡大してみる。」

すると、そこには異形の怪物が立っていた。

「あれは…！」

「なんだ剣崎、知ってい「今すぐ、生徒を避難させてください。早く！」…わかった。

山田先生。」

「ハイ！」

「聞いていただろう。今すぐ生徒を避難させろ。」

「わかりました！」

「剣崎は、「行かせてください！」わかった。そのために、お前はここにいるんだろ。」

「ありがとうございます。」と、言いながら彼はフィールドに走って行った。

「なんですよ、あれは！」

彼女の眼には、落ちてきた異形の怪人…トリアルEがいた。

一夏は、シールドエネルギーがないのでセシリアが遠くに置いてきた。

「ですが、彼には殺気が感じられますわねえ。

私が倒してあげますわ！」

と、言いスターライトmkIIIを撃ち、それは直撃した。

「やった!」

彼女は、勝利を確信したが、つかの間。

なんと、トライアルEは無傷のまま立っていた。

「なんですって!？」

すると、トライアルEは、自身の右腕にあるアームガンを連射してきた。

とつさのことだったので、バリアも張らずに手で顔をガードし目を閉じた。

しかし、いつまでたっても痛みは来なかった。

「えっ。」

目を開けた時、彼女の前にいたのは、自身の剣…『ブレイラウザ―』を持ち、銃弾をすべて叩き落としていた。

「セシリア、大丈夫か。」

「ハイ。」

「じゃあ、ミサイルを2発ほど、撃つてくれ。」

あいつは、攻撃されているときは防御に専念していたからな。」

「わ、わかりましたわ。」

そして、セシリアが2発ほど撃ったところで一真がセシリアの手を持ち、一夏と同時になるべく安全なところに避難させた。

「これから、どうするんですか？

剣崎先生。」

「俺が、あいつを倒す。

お前たちはここから離れる。」

「でも、先生はISが使えないのでは。」

「大丈夫だ。

俺は、あいつらを倒すためにここにいる。」

「で、でも1人じゃ「一夏!」千冬ねえ「織斑先生と呼べ!」はい。」

「聞いていただろう。

今すぐ、避難しろ。」

「でも、彼は、「避難しろ!」…ぐっ!」

「平気だ、一夏君。

俺は、負けない。

それに、一夏君やセシリアちゃんや他の生徒がこの学園を俺は壊させない。

だから、行ってくる。」

そして、一真とセシリアは、トライアルEのもとへ行った。

「待っていてくれたんだな。

ちよっと、下がっていてくれないか、セシリアちゃん。」

「わかりましたわ。」

「俺は、学園を守る。

そして、みんなを守る。

俺は、俺は仮面ライダーだ！」

そういい、ベルトを腰に巻き、左腕を腰の位置に置き、右腕を手のひらを自分の方へ向けた状態で

左斜め前方へ移動させ、高らかに叫んだ。

「変身……!!」

決着の少し前／ターンアップ！！！（後書き）

コメント、お待ちしております。

戦闘開始／お姫様抱っこ！？（前書き）

戦闘部分むずい。

今日は、これから、病院だあ！

では、どうぞ。

戦闘開始／お姫様抱っこ！？

「変身！！！」

そう一真が叫んだ瞬間、目の前の空間に投影されたオリハルコンエレメントを通り抜ける。

すると、そこにいたのは一真ではなく、紺色の戦士…仮面ライダーブレイドがいた。

「剣崎先生も、ISを…。」

「行くぞ！セシリアちゃん！」

「今は、そんなこと考えても仕方ないですね。
わかりましたわ！剣崎先生！」

そう言っ、一真…ブレイドはトライアルEのもとへ駆け寄り、セシリアはスターライトmkIIIでブレイドに当たりそうな敵の弾丸を打ち落とす。

ブレイドは、トライアルEに近づくとおもむろにスピードの7…Metal Trilobitのカードと、スピードの3…Beat Lionのカードをラウズした。

ピピッ！『METAL』『BEAT』

と、ブレイラウザーが言い、体が鉄のように固くなり、右手にパ

ワーが宿りパンチをトリアルEに放った。

トリアルEがおびんだ隙にブレイラウザーで切り付ける。

すると、トリアルEはブレードから狙いを変えたのか、今度はセシリアに向かって銃弾を撃ちだした。

セシリアは、スターライトmkIIを撃つが数発しか撃ち落せず、そのまま、トリアルEの弾丸はセシリアに迫ってくる。

「キャア！」

『M A C H』

セシリアは、痛みに耐えるために目を閉じた。

だが、いつまでたっても痛みは来なかった。

「えっ？」

目を開けると彼女の前に彼女が当たりそうになった弾丸をすべて代わりにうけたブレードがいた。

「剣崎先生！」

「平気平気。」

それより、アイツの動きを止めてくれるかな？
決着をつけるから。」

「え、ええ。」

「グギャーーーーーア！」

ブレイドは、懷を数回斬ると、トリアルEは叫び声を上げながら絶命した。

セシリアは、ブルー・ティアーズを解く。

（す、すごい…！

少しの隙で、あの怪物を…。）

そう考えていると、前から「セシリアちゃん？」と、いつの間にか変身を解いていた一真がいた。

「け、剣崎先生。／＼／＼」

「さあ、みんなのところに帰ろう、セシリアちゃん。
みんな心配してるよ。」

「は、はい！」

剣崎先生…つう！。」

「ど、どうかしたの！？セシリアちゃん！？」

「ちょっと、足を切ったみたいですわね。」

「大変だ！」

「ちょっと待ってね。」

そういうと、一真はセシリアをお姫様抱っこをした。

「え？／＼／／」

「これなら、セシリアちゃんが歩かなくても平気ですよ。」

「えっ、ですが、これはちょっと…。／＼／／」

「はいはい、けが人は静かにしなきゃねえ。」

「こういうやり取りが、一夏たちのところまで続いた。」

戦闘開始／お姫様抱っこ！？（後書き）

コメント、お待ちしております。

説明会／彼の目的（前書き）

年末年始には、風邪を治らせなければ。

では、どうぞ！

説明会／彼の目的

トライアルEを倒した後、

一真が、セシリアが怪我をしていたので、彼女をお姫様抱っこしながら保健室へ運ぶ途中、千冬と若干驚いている一夏に会い、明日、今日の事を保健室にいるセシリアのところで、話すことをが決定した。

次の日、

保健室には、セシリア、一真、一夏、千冬の4人が集まっていた。

「で、昨日のことについて話をするんだけど、何か質問はあるかい？」

「「ハイ！！！」」

「じゃ、じゃあ最初は、一夏君から。」

「あの怪物はなんですか？」

「あの怪物ってトライアルEのことか…。」

「「トライアルE？」」

「剣崎、それは私も気になっていたことだ。話せ。」

「言われなくても…。」

トリアルEとは、トリアルシリーズの中の1体だ。

昔、広瀬義人が作っていた人間データとアンデッドの細胞を合わせて作った実験体だ。」

「ちょっと待ってくださいまして。

アンデッドとは一体何ですか？」

「ああ、そうだったな。

アンデッドとは、1万年に1度行われるバトルファイトだ。

彼らは、自らの種の繁栄を賭けて戦っている。

以前のバトルファイトではヒューマンアンデッドのおかげで人類の繁栄が成り立ったわけだ。」

「ということは、剣崎。

私たちがこの世界にいられるのは、そのヒューマンアンデッドのおかげだということのか？」

「その通りです。」

「あと、剣崎先生。

あの剣崎先生の姿はなんですか？」

あれは、ISですか？」

「あれは、ISじゃないよセシリアちゃん。

あれは、ライダーシステム。

アンデッドを封印するためのものだ。」

すると、今度は、一夏が疑問に思ったことを聞いた。

「封印っていうと？」

「アンデッドは、細胞のひとつかけらまで消し去らないと不死身だ。だから、それを一定のダメージを与えて封印しなければならぬ。」

「で、あの戦闘で使ってたトランプみたいなカードは？」

「あれは、アンデッドを封印したカードだよ、一夏くん。封印したアンデッドの能力を使って、変身したり攻撃したりするんだよ。」

「へえ、でも、なんで剣崎先生が？」

「ああ、俺は適合率が高かったから。ISもそうだろう？ 適合率が高くなければ使うことができない。」

「で、でもいきなり戦えって言われたら戸惑うでしょ。」

「それが仕事だったから。それに、その仕事に誇りだってあった。それを通して、初めての友達を作れたし、仲間だって作れた。」

「怖いけど、優しい上司。牛乳好きな、小説家見習い。頼りがいのある先輩。仲間のために戦った後輩。そして、無愛想だったけど、人類のために戦った親友。」

「だから、この仕事を続けられたんだ。」

それを聞いた2人は感動した。

「へえ、すごいなあ。」

「そうですわね。」

「で、なんでその剣崎先生がここにいるの？」

「それは、君を守るためなんだ。」

「一夏君。」

「お、俺を！？」

「そうだ。」

今は詳しく言えないけど、君はとある組織に狙われている。だから、それを防ぐために俺はここにいるんだ。」

「そうだったの！？」

千冬ねえ「織斑先生と呼べ。」…織斑先生は知ってたのか？」

「ああ。」

「なら何でおれに！」「お前に言っと、いつも単独行動をとろっとする。それに、勉強にも集中できんだろ。」「うう…一里…ある。」

「じゃあ、これで終わりだ。」

このことは、他の生徒には内緒にしてもらえるかな？。」

「「わかりました。」」

「では、これにて解散！」

説明会／彼の目的（後書き）

コメント、お待ちしております。

中華娘／久しぶり！？（前書き）

今回は、短いです。

では、どうぞ。

中華娘／久しぶり！？

決闘から、2週間後の一夏たちの教室

セシリアの傷も回復し、100%勉強に復帰した。

そんな、とある日だったが、一夏とセシリアといつもの3人組と話していた。

「あ、そうそう、今日さあ、隣のクラスで転校生が来るんだってさ。」

「で、確か中国代表でクラス代表とかなんとか…。」

「ふう〜ん。」

「やはり、このセシリア・オルコットを今更ながら危ぶんでの転校ですかね。」

そうセシリアが言うと、他の4人は（いや、ないない。）と、言いたそうな顔でセシリアを見た。

「な、なんですのその目は！
だいたいですわね…。」

「はいはい。
でも、こつちには専用機持ちが2人もいるんだし「その情報、古いわよ。」えっ？」

声をした方を見ると、小柄な体型でツインテールの子がドアにもたれ掛りながら彼らの話を聞いていた。

「お、お前もしかして、鈴か？」

「ったく、そうよ。

私がその転校生。

鈴よ。」

「何で、気取ってんだ？
似合わねえぞ。」

「……！／／／

ちよっ！何よ！ちよつとクールにしてただけじゃない！
このバカ一夏！」

「大丈夫だ。

馬鹿は、私の目の前にもいるぞ。」

そういつた瞬間、彼女は背筋に冷や汗が流れ始め、
後ろを見るとそこには仁王立ちした千冬がいた。

「……！

ち、千冬さ「織斑先生と呼べ。」はい。」

「もう、チャイムが鳴った。

邪魔だ。」

「す、すみません「織斑先せーい！すみません。遅れそうになりました。」って、一真！？」

「あれ？なんで鈴ちゃんがここに？」

「それは、こっちのセリフよ。」

「え？えーと、2人はどのようなご関係で？」

「ん？友達。」

「悪いが、また、あとでにしてくれないか。
授業ができません。」

「わかりました。」

「じゃあね、鈴ちゃん。」

「じゃあね、一真！」

あと、一夏。

待ってなさいよ！」

「「急すぎて、ついていけんわ（いけませんわ）！……！」」

中華娘／久しぶり！？（後書き）

コメント、お待ちしております。

出会い／彼の回想（前書き）

グダグダ＋長い。

だが、書いた。

2011年最後の投稿だ。

では、どうぞ。

出会い／彼の回想

キーンコーンカーンコーン！

勉強が終わり、一夏、箒、セシリア、一真は昼食を食べるため食堂へと向かう途中に鈴とも会い、一緒に食事を食べることになった。

「…で、アイツ（鈴音）とは、どういう関係だ（ですの）？」

一真と一夏は、一夏側に箒・一真側にセシリアという感じに挟まり、見事に身動きが取れなくなった。

「いやあ、友達だけど。」

「いやあ、幼馴染だけど。」

「いろいろ、突っ込みたい部分はあるが、最初は、一夏からだな。」

「ええーと、確か箒が転校した後に、鈴が転校してきたから、ちよつと箒と鈴が入れ違ったんだ。」

だから、箒がファースト幼馴染で、鈴がセカンド幼馴染になる

な。
」

「ファ、ファースト幼馴染！／／／」

すると、いきなり鈴が反抗してきた。

「セカンドってどういうことよ！

なんで、あたしがファーストじゃなくてセカンドな訳！？」

「それは、仕方がない」 「仕方がないってどういうことよ！」 …
だつて…。」

「まあまあ、いいじゃないか。

幼馴染は幼馴染なんだから。

それに、今度は俺の番だろ。」

「で、剣崎先生はどういったご関係で！？」

「確か…。」

剣崎回想

あれは、俺が中国にいたころかな。

その日、俺は山を探索してたんだけど、遭難しちゃって。

で、どうしようかなあ…。なんて、考えてたら、鈴ちゃんのお

父さんが中華料理に使う食材を探していたのに偶然会って、そのま
ま、鈴ちゃんの家に居候させてもらうことになったんだよ。

それで鈴ちゃんと会ったわけだ。

「ちよつと、お父さん。

この人、だれ？」

「ああ、この人は剣崎 一真って言って、お金がないから泊まら
せることにしたんだ。

こっちは、娘の鈴音だ。

仲良くしてくれ。」

「初めまして、剣崎 一真です。」

「ふん。」

そう言い、鈴は自室に帰って行った。

それから、3か月間ぐらいお世話になったんだよね。

その間の鈴ちゃんは、ちよつとやさぐれてたかなあ。

それから数日後、突然、街にISを持った10〜20人ぐらいの
女性たちが来て、スピーカーを通して言ったんだ。

「これから、ゲームを始める。

24時間以内にISで貴様らを殺す。

最後まで逃げ切れたら、生かしてやるう。

それから、この街に剣崎 一真という奴は居るか？

いたら、来い。

おとなしく来たら、ゲームは止めよう。」

そう言い終わると、街の至る所で爆発が起きた。

ISが一齐に来た。

「剣崎君。

行ったらだめだ！

絶対殺される！」

「アイツらは、俺が目的です。

俺が、行けばみんなが助かるんです。

それに、俺は死にませんよ。

信じてください。

それに、まだ鈴ちゃんと仲良くなってません。

だから、俺、行きます。」

「剣崎君……。」

すると、苛立ちを感じていたのか、鈴が言った。

「だったら、私も連れて行きなさいよ！

あんただけじゃ任せらんない！

友達になりたいんでしょ！

意味わかんない！

アイツもお前も意味わかんない！」

「君の方が意味わかんない……何か言った！？」「いえ！なんにも！」

「わかった。」

でも、無茶だけはしないで。」

「わかってるじゃない。」

最初からそうしなさいって。」

じゃ、行ってくるから。」

「ここで待っていてください。」

外に出でるのは危険ですから。」

「わかった。」

でも、死なないでくれ。」

必ず帰ってきてくれ。」

鈴も無茶はするなよ。」

「はいはい。分かってますよ。心配性だな。」

「じゃあ、行ってきます。」

そうして、彼らは、戦場に行った。

出会い／彼の回想（後書き）

コメント、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6220z/>

IS ～運命を切り裂く剣～

2011年12月31日21時47分発行